

日本から
出たことが
なくてもできる

世界の伝え方

話さない無責任より、話す無責任を選ぼう



日本から
出たことが
なくてもできる

世界の伝え方

話さない無責任より、話す無責任を選ぼう

- 0 はじめに
- 1 日本から出たことのない人には話せないのか
- 2 それでは誰が世界を知っているのか？
- 3 魔法の言葉「知らんけど」
- 4 具体的な方法（簡単な実施方法）
- 5 おわりに

0 はじめに

地球規模の問題と言われた時にどんなことが思い浮かびますか？

少し古いデータですが、平成17年に外務省が実施した「地球規模問題に関する意識調査」によると、地球温暖化や環境破壊を日常生活であなたが深刻に感じている問題であると答えた人がその他に比べて圧倒的なパーセンテージを叩き出しています。

実際、この調査から10年以上経った現在でも学校などで「地球規模で取り組まないといけない問題は何があるか」という問いに対する答えは概ね地球温暖化に集中することから世間の感覚は大きく変わっていないことが経験から感じられるところです。本当に地球温暖化や環境破壊こそが地球規模で取り組むべき問題だと感じているからこのように回答がされているのではなく、その他の要因がそこにあるのではないのでしょうか。

グローバルな社会づくりなどと標榜して、街中で多くの外国人を目にする機会は増えたとはいえ、陸路で海外とつながっておらず、日常的に日本的なるもの以外との接点は意識しない限りほとんど感じ取れないのが実情でしょう。さらに国内で貧困問題や社会格差が話題に上がることはあれども、世界の貧困や水、医療、教育、人口、数え上げればきりが無いほどの問題にメディアも世間も無関心です。これらが結果的に、日本人の中で地球規模な課題と言われた時に無条件に地球温暖化が出てくる状況と無関係とは到底思えません。

この小冊子は、世界に一步も出たことがない人でも世界や世界の抱える課題について話ができるようになるための手引書です。多くの人が世界のことについて当たり前のように話ができるようになり、世界の抱える課題が身近になることが問題を解決する一つの糸口になることを期待しております。

学校の先生を想定して文章は書いていますが、子育てや地域活動などにも通じる部分もあると思いますので、ご活用ください。

1 日本から出たことのない人には話せないのか

「世界のことを伝えたいけど、私は行ったことないし知らないから無理です」

学校などで講演やワークショップをさせていただく時に先生からかなりの頻度で言われる言葉です。さて、これは正しいのでしょうか。

でも、他にも知らないこと（詳しくはないこと）を話さなければいけない機会ってたくさんありますよね。小学校だったら全教科を教えないといけない。でも、全教科全てに高い専門性を持ってると言うそうではないでしょう。あるいは、中学や高校で教鞭をとられている国語の先生の中にも古文はちょっと苦手だなとか思いながらそれでも教えてる先生もいるでしょうし、他の教科でも似たようなことは多々あるはずですよ。『行ったことがない、経験してないから無理』と言う点に関して疑問を感じます。例えば光合成や数学の定理などであれば自分が発見したわけでもないのに、まるでよく分かっているように話ができますよね。それらの知識を伝えることと世界について伝えることは何が違うのでしょうか。

一つ目の違いは、教科書に載っている話か、そうではないかというところがあるでしょう。教科書というお墨付きであれば安心して話せるという考えは理解できます。

二つ目の違いは、教科書に載っているか否かにも通じるところですが、『世界の話』というのを正確に表現すると『世界の今の話』です。『今』という点は常に変化しているのでもうしても不確かな情報でしかありません。だから話をしにくいというのも納得ができます。

逆にいうと、教科書には過去の話が載っている、だから伝えやすいと言えるのかもしれませんがね。

『世界の今の話』なんてものはいい加減なものです。そう考えると、海外に行ったことがあるうとなかろうと、世界の話ができるかできないかというのは無関係な気がしてきませんか。誰にでもできなさそうですし、誰にでもできそうです。

さて、それでは誰が世界のことを知っているのでしょうか？

2 それでは誰が世界を知っているのか？

結論から言うと、世界を知っている人なんてどこにもいません。国連の事務総長でも、どこかの国の大統領でももちろん同じです。それは、私たちが日本を知っているの？と問われても正直答えに詰まるのと似たようなものです。それでも大丈夫。「知らない」あるいは、「わからない」ものなんだということを理解すればそれで十分です。

ただし、私たちは世界の様々なことを少なくとも間接的に知ろうと思えば簡単に知ることができます。検索ボックスに国名を入れてエンターキーを叩けば求めてないぐらい詳しい情報が目の前に飛び込んでくるでしょう。

かなり詳しい、そして深い話もあるかもしれません。読みながら「なるほど!」「知らなかったぞ!」なんて一喜一憂しながらぜひ様々な情報と触れてみてください。

それらの情報の中に正しいものは一つとしてありません。

しかし、それらの情報は全部正しいのです。

書き手にとっての真実であって、それは切り取られた世界の中で、あるいはその個人の中で至極最もなことが書かれています。だから、私たちは「へえ」「なるほどな」と思いながら読めばいいのです。心の中で疑いの目を持つことを忘れずに。

3 魔法の言葉「知らんけど」

ここで突然ですが「知らんけど」という言葉はご存知ですか。もちろん言葉そのものの意味は知っているでしょう。ここではその用法の話です。

関西ではこの「知らんけど」が多用されます。あなたの身近に関西出身の人がいるなら意識して話をしてみてください、きっとこの「知らんけど」をよく使っていると思います。

「あそのパンケーキ、めっちゃ美味いらしいで！知らんけど」

「明日、学校休校になるらしいで。知らんけど」

「やってみたらええやん、上手くいくで。知らんけど」

この「知らんけど」という言葉には様々な意味や用法がありますが、少なくとも不確定なことを話す時の不安感を取り去り、無責任かもしれませんが話をする後押しをしてくれる言葉です。

これこそが世界と私たちの距離をぐっと縮めるための特効薬になる魔法の言葉になると思っています。

「ミクロネシアではウミガメを食べるらしいよ。知らんけど」

「カンボジアでは子どもが2万円で売られるんだって。知らんけど」

「エチオピアでは1日の大半をコーヒーを淹れるのに使うらしいよ。知らんけど」

子どもが売られている話を「無責任」にするなんて不謹慎だ！なんて声が聞こえてきそうな気がしますが、よく考えてください。実はどこかで耳にしたことがあるような話を「無責任」にすら話をしていない、伝えようとししない大人の無責任に比べたら不確定でも自信がなくても話をする「無責任」さなんて些細なことだと思いませんか。

ただ、先生にも詳しくはわからないんだけどね。いつか先生も自分の目で見て見たいなと思っているんだけどね、みんなも大きくなったらぜひそういった問題とも向き合えるようになってね。という謙虚さは必要でしょう。

なるほど、と思ったら今日からでもぜひ、取り組んでみてください。きっとあなたの周りにいい影響をもたらすと思いますよ。知らんけど。

4 具体的な方法（簡単な実施方法）

ここまで読み進められて、なるほど自分でもちょっと世界の話をしてみようかなと考えてもらえるようになったのでしょうか。しかし、そう思ってもなかなか実施できないのが学校現場だと思います。ガチガチのカリキュラムの中で実施するための時間もなければ準備にける余力もない。そんな声が聞こえてきそうです。

そのために簡単な実施方法についてここで提案したいと思います。

それは、＜朝の10分間世界旅行＞です。これは別にお昼の10分間でも、放課後や帰りの会の10分間でもいいでしょう。それならカリキュラムを変えなくても、あなたの教室だけでも取り組めますよね。毎日できなかったとしても週に1回からでもスタートできます。

でも、そんな準備をする時間はないよという場合も大丈夫です。世界の話をするのにそんなに準備をしなくてもできます。これまでに何度も述べているように、準備をしたくても逆にできることが少ないのです。答えのない授業に答えを準備する必要はありません。

写真を一枚用意しましょう。

例えば、この写真を見せて「どこの写真だと思う？」



そんな問いかけをすれば子どもたちは口々にいろんな意見を出してくれるでしょう。

「写っているのは何年生かな？」

「何をしているところだろう？」

「なんでもいいから気づいたことを教えてください」

答えの決まっている質問から自由な回答ができる質問まで様々な質問を投げかけてみてください。そして出てきた答えに対してさらに深めるための質問をしてみましょう。

「どうしてそう思うの？」

「どこを見てそう感じたの？」

一枚の写真でもかなりのことに子どもたちは気づくことができるはずです。そして、この学習をするために先生が必要なことは写真を持ってきて印刷することだけです。こんな簡単な活動からでも子どもたちの、あるいは実施者自身の偏見や世界に対して無知、あるいは無関心であったことに気づくことができるはずです。そして何よりこの活動は楽しく、子どもたちの異なる文化への関心や、自分と違う考えや習慣を受け入れようとする心を喚起しましょう。

そして、ひとしきり写真で盛り上がったなら「今日の国は〇〇でした。昼休みや、家に帰って〇〇について調べてみてわかったことがあったら先生に教えてね」と言っておけば、翌日には興味を持った子どもたちが自分の新しく知ったことを嬉々として教えてくれるでしょう。また、教室に地球儀などを用意しておけば、すぐに飛びついて今日見た写真の国を探す姿が見れるはずです。

話の膨らませ方や、写真などについては、学校から世界のミカタを考える会のホームページ (<http://sekai-no-mikata.jimdo.com/>) 上の【教材・ギャラリー】のページに様々な国の話や写真が国やテーマごとに掲載しているので利用していただくこともできます。

5 おわりに

ここまで書いてきて、伝えたいメッセージはいたってシンプルです。それは、日常的に世界の問題について口にする大人が増えて欲しいということです。そして、それができるのはこれを読まれている現場の先生方だけです。

「やっぱり、外国での生活をしてきた人の生の声は違います！私たちが話しても子どもたちには珍しさもないし、伝わり方が違うんですよ！」

今にもそんなご意見が聞こえてきそうですが、そうじゃないんです。そういうコマももちろんあっていいし、必要だと思います。しかし、珍しさがないぐらい普通に世界の話をしてもらいたいです。年に1回、2回の特殊な授業としてゲストティーチャーが話すのではなく、日頃から子どもたちに寄り添うように接している先生だからこそ伝えられることがあると信じています。

もし、実施するにあたって不安な部分や具体的なアドバイスが欲しい場合は遠慮なく「学校から世界のミカタを考える会」にコンタクトを取ってみてください。できる範囲でのサポートはさせていただきますし、日程の調整がつけばこの資料の内容についてのセミナー・ワークショップや、実際の体験談のデモンストレーションなどの依頼も受けております。

最後になりましたが、本冊子をまとめるにあたってご助言をいただいた方に心より感謝いたします。ありがとうございました。また、あなたの授業実践が成功することをお祈りしております。

※本冊子に関して、ご意見やお気づきのことがございましたらご連絡をお待ちしております。

※無断複製・転載・配布はご遠慮ください。希望する場合は、下記メールアドレス宛にご一報ください。

編集／発行

学校から世界のミカタを考える会

E-Mail : koji.sekainomikata@gmail.com

<http://sekai-no-mikata.jimdo.com/>

<https://www.facebook.com/sekainomikata/>